

第二十四編 經濟一斑

概説

大正九年四月の恐慌以來我經濟界は其打撃の下に呻吟しつゝ本年に入つたが、今年も財界整理時代たることを免れなかつた。殊に著しい入超は昨年來の傾向を益々深刻化したものであり、日清日露兩戰役後の入超時代を忍ばしめる如き貿易状態が展開し始めたのであつて、我財界の暗流である。翻つて物價状態を見れば、昨九年四月以來下落の一途を辿り來つた物價が本年四月より漸く反騰の状態を持續し十一月の反落を例外として十二月には又騰貴を示した。斯く物價の持直しは、不振の中に在りながらも事業界そのものに取つては稍々小康を與へた。この物價漸騰の原因は一には政府が何等物價引下げの方法を講じないのみか戰時の金輸出禁止の制度を今日に至るまで嚴守し、通貨の膨脹せる爲めであり、二には重要産業に於て、當業者は生産制限。賣買協定のカルテルを作つて物價の騰貴を計つ

たことに在る。かくて物價騰貴の傾向は事業界に多少の小康を與へた。けれども勞働者や一般消費者に取つてそれは如何なる意味を有するであらうか。事業界に無理算段の小康を見たところで、大恐慌後の今日の整理期に在つては事業界の整理（縮少、合同、解散等）に依て多數の勞働者は失業し一般消費者と共に物價騰貴の脅威の前に戦慄しなければならぬ。況んや事業家は入超の對策として輸出の促進の爲め生産費の節減を企て彌が上にも賃銀の引下げを企劃して勞働爭議を激成してゐる有様である。

物價の騰貴は輸出を困難ならしめる。然るに上述の如く資本家は一方に於て物價の騰貴を企圖し、他方に於ては消費者たる一般民衆の危険と計算とに於て輸入を妨げながら輸出を増加するの方策を講じつゝあるこの矛盾は必然に行詰らねばならぬであらう。然り、資本家當路者の上述の如き反抗にも拘らず入超は其濃度を増しつゝあることは財界として行詰らせるであらうけれど

も民衆に取つては物價が平調を來す爲めの必然の血路であらう。

兎も角本年の財界は、一般民衆の危険に於て金の輸出を禁し、輸出を保護し、賃銀を低下し、以て當然來るべき入超時の財界動搖に小康を與へて年を終つたのである。

以上の概論を基礎付ける爲め次に數字に依て企業、貿易、物價、金融、在荷の情況を述べよう。

第一 企業

日本銀行調査の事業計畫資本調べに依れば各月共大正九年乃至八年よりも著しく減少してゐる。昨年より引續いた事業界の不振は本年に入つて益々其濃度を加へつゝあることを證明する。

銀行會社計畫資本累月比較表（日銀調）

	十年	九年	八年
一月	一九一、五五	六七〇、三三	二〇〇、五三
二月	一六八、六〇	九六三、二三	一〇六、六四
三月	三三〇、三〇	一、一四八、四五	一五七、六五
四月	二〇七、〇六	九四、七六	一七六、四七
五月	二六三、五五	二七、六三	二四、二〇
六月	二六、〇七	一六七、七〇	二八、三〇

七月	二〇七、〇四七	一九八、六八九	二六七、五三〇
八月	九五、六六〇	一五〇、五〇三	四三三、七三三
九月	一九〇、七九七	二〇三、七八五	四三三、三三六
十月	一九七、六六二	一七五、五四五	五九〇、九四三
計	一、八六八、二九一	四、八九二、六四四	二、八九九、三三九
全年計	—	五、二二三、六九	四、〇六八、四七五

次に此資本減少の状態を事業別に就いて見れば製造工業（特に化學工業、機械工業、金屬工業、窯業、製織、食料品工業）、鑛業、倉庫信託、運輸業（特に海運事業）、水産業等の減少は極めて著しかつた。然るに一方電力、瓦斯、造船船渠等の事業では却て増加を示してゐる。造船船渠の計畫資本の増加は全く海軍擴張に原因するもので既存會社の増資の結果であるが、ワシントン會議に於ける軍備縮少條約履行のためには再び斯業の非運が来るであらう。計畫資本の内容を事業別に示せば次の如くである。

事業別計畫資本調（日銀調）

	十年	九年	八年
銀行業	一三〇、九九八	六三七、八四九	五二〇、四四〇
信託金融	五一、五〇〇	二〇九、六九七	—
倉庫	二、七五〇	二六、一四六	六、四三〇
保險	二七、五〇〇	五〇、五〇〇	四八、八〇〇
運輸	二六、二七〇	五七、七六六	三四、一七五

經濟一斑

減資解散資本調（千圓單位）

鑛業	一一〇、三六〇	二二六、一四五	一二七、六八〇
電氣業	三五〇、八九八	一七一、八四五	三九二、四四八
製造工業	三九七、四五五	一、六九四、四一一	八〇八、九三一
水産業	七、二二五	五〇、九〇〇	二三、〇五〇
農林業	九二、五〇〇	一八一、五七〇	一三八、九七〇
商業其他	三九五、九三五	一、一五、七八三	三八二、九〇五
合計	—	四、八九二、六二二	二、八九九、三三〇

備考 一月以降十ヶ月間

尙ほ諸事業の不振は上述の如くであるが之を興業銀行の調査に依り減資及び解散の方面から見れば昨年比しても著しく其額を増してゐる。

製糖	一、三〇〇	五、〇〇〇	—
製紙	一、〇〇〇	三、〇〇〇	—
釀造	七五〇	五、七六五	—
窯業	一、八〇五	一一、三三九	—
紡織	一四、〇八五	二七、八三七	—
機械	三四五	八、七五〇	—
金屬	一、四七五	四、八五〇	—
製粉	—	三、二八五	—
製材	五五〇	六、一一九	—
鐵軌	六〇七	二〇、八二一	—
海運	二、五五五	一七、六五五	—
電軌	一、四三六	一九三、一一四	—
鑛業	二、九三〇	二〇、六二六	—
其他共計	一三八、七〇七	六五四、〇八二	—

備考 一—十一月累計

又日銀調査の大正八年以降の解散及減資の表を示せば次の通りである。

解散及減資（一—九月）

	十年	九年	八年
銀行	七六、〇三七	六、七八五	六、九三〇
信託金融	二四、七七三	一四、一四五	—
倉庫	三、三八〇	五七七	—
保險	二六五	—	—
鐵道	二、八〇三	八六八	一、八五九
海運	三三、九〇八	三、三七〇	二、六八〇
鑛業	四三、五二八	一五、五二〇	一一、九〇六
電氣	一〇三、七二五	二六、三六〇	八、八八〇
瓦斯	—	二五〇	五、六七
紡織	一一、〇五〇	一、〇三〇	五、一四〇
製織	一四、一一七	二、〇〇三	三、四四七
化學	三三、五九四	一四、一五五	一六、四六三
機械器具	二二、二二八	六、九四五	四、八九一
造船船渠	四、七三五	一〇、五二〇	四、一〇〇
窯業	一八、〇九五	三、五八五	四、九九九
金屬工業	七、〇三八	八、〇二〇	三、八六〇
食料品	二四、一四六	九、五二〇	—
水産	六、六七	五、六五	一、五九六
農林	九、五三三	一、〇六七	一、九一七
商業其他	一四、〇五四	二二、六五三	三〇、二四四
其他合計	六二〇、五七五	一五四、九六三	一三五、四三〇

次に主要な事業に就き極めて鳥瞰的に梗概を示さう。

(1) 炭礦事業

石炭諸會社の収益から見れば昨年下半年より著しく減じ本年上半期に入つては次の如き形勢を示してゐる。

	九年上	九年下	十年上
北海炭礦	五、九二 <small>千円</small>	四、二七 <small>千円</small>	二、三〇 <small>千円</small>
大日本炭	五、五七	一、五三	一、三
九州炭礦	五、八三	三、五七	一、三六
入山探炭	一、二五三	六、七九	五、五七

そこで五月一日以來一割七分の採炭制限を行つた爲め、八月以來貯炭減少し市價反騰し始めた。

(2) 石油事業

内地石油の供給は現在常に不足の状態に在るのさ、内外三社の協定に依りて市價は比較的下らなかつたが、外油が暴落を來した爲め、帝國、旭の兩石油會社が新に之が輸入を企て、又國際石油、日本國際石油、内外石油等の會社が外油輸入の目的で新設された。更に日寶兩社は九月に合同され、斯業の統一的傾向が濃厚になつた。斯う云ふ調子で外國の廉い石油も消費者のランプには高く點火されるのである。

(3) 船舶事業

海運界の不況と相俟つて船舶會社の事業は極

めて不活潑であつた。従て労働爭議は殆んど造船業を中心起つたと云つてよい程であつた。

元來造船業は我國に於ては歐洲戦争を轉期として初めて勃興し一躍世界第三位の造船國となつたのであるが、本年に至つては事業の基礎さへ動搖する程の衰退を來した。本年の建造高の激減した有様は次表に依りても明かである。

二年	七、七四 <small>隻</small>	九、五、一、二三 <small>噸</small>
三年	六、三六	一、一七、四〇一
四年	四、七四	七、七、四、五四
五年	六、一三	一、九〇、〇七一
六年	七、二二	四、八六、一〇八
七年	七、九〇	六、九七、〇六七
八年	三、五六	六、七四、四七九
九年	一、九七	四、五五、七四六
十年(十月迄)	七、一	一、八二、八二七

備考 八年迄は總噸數二十噸以上の登録船舶

九年以後は百萬噸以上の進水船

即ち休戦前一ヶ年に約七十萬噸を進水したものが、昨九年に於ては四十五萬噸に減じ、本年(十月迄)に於ては僅々十八萬噸に激減した。而

も、今日造船業が是れだけの命脈を保つてゐるのは海軍擴張の仕事を受けつゝからである然るにワシントン會議の軍備縮少の影響は斯業に取り一層の打撃となるであらう。因に造船所

數は本年六月現在に於て二十一(廿七工場)で

ある。

(4) 肥料事業

肥料及び製糖の事業は製造工業中に在つても特に不振を極めて居る。會社は九年以來四割乃至六割の操業短縮を行つたけれども大勢を動かすことは出来なかつた。考課狀面記載のものを拾つて見てもラサ烏樺礦、日本窒素を除いては皆な缺損してゐる。

(5) 銅事業

内地銅産額は國內の需要を充すに足りないが米國の銅が暴落したので、従て其影響を受け一方生産制限を行ふと共に關稅引上を要望して銅價の維持を計らんとしてゐる。

(6) 製紙事業

昨年の恐慌以來未だ恢復せず、聯合會所屬會社は九年十二月より二割の操短を行ひ、十一月迄の豫定で本年中は之を續けた。斯の事業は益々經營難に陥りつゝある様である。

第二 貿易

本年に入つても依然大正八年以來の入超が繼續してゐる。即ち

八年の入超

七四、五八七千円

九年の入超

三八七、二七六

十年の入超 三六〇、六二九

であつて、漸く戦後経済界の反動が深刻化しつつあるものと言へよう。

本年の月別貿易表を擧ぐれば次の如くである。

月別十年貿易表(千圓)

月	輸出	輸入	入超
一月	七五、〇七	一五、三三	三〇、一六
二月	六六、六九	二九、三六	三三、三三
三月	六四、一〇	一六、九三	四七、一七
四月	二五、五三	一三、四六	一三、〇七
五月	一〇五、七〇	一四、八二	九〇、八八
六月	二七、〇六	一四、一五	一三、〇一
七月	九八、六三	二〇、三〇	七八、三三
八月	一〇五、五三	一三、〇六	九二、四七
九月	九五、八三	二九、一六	六六、六七
十月	一一、五六	一三、三三	二、七七
十一月	三三、三四	一五、七〇	一七、六四
十二月	一五、五四	一六、一五	一、六一
計	一、三三、三四	一、六三、八〇	三〇〇、四六
九年	一、九八、四三	二、三三、六一	三三、二七
八年	二、〇六、八三	二、一三、四〇	七、五七

經濟一斑

してゐる點から見ても本年の貿易は未曾有の入超時たる九年よりも一層入超時代たるの特色を明かにしてゐる。今輸出入内容百分率表(十一月月累計)を擧げれば次の如くである。

品名	輸出		輸入	
	十年	九年	十年	九年
食料品	六・五	七・三	二・七	九・三
原料	六・五	七・一	四・七	五・三
原料用製品	四・四	三・三	二・一	二・六
全製品	四・〇	四・一	九・六	三・三
雑品	一・五	一・二	七・七	六・六
合計	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇	一〇〇・〇

惟ふに正貨の保有がこの需要(兌換準備としての)を超過するときには必ずや其大部分は入超に對する支拂となつて海外に流出することは我國に於ては日清、日露戦後の入超期の經驗に徴しても明かである。然らば我國の正貨の状態は如何であるか。

正貨増減表(百萬圓)

月	十年		九年	
	正貨在	對前月	正貨在	對前月
一月末	二、一八三	▲	二、〇〇四	▲
二月末	二、二七〇	▲	一、九三三	▲
三月末	二、二六〇	△	一、八七一	▲
高總額	▲	▲	▲	▲
増△減▲	▲	▲	▲	▲

四月末	二、二六四	▲	一、八六〇	▲
五月末	二、二五九	▲	一、八七一	△
六月末	二、二五五	▲	二、九三三	△
七月末	二、二四二	▲	二、九四〇	△

即ち大正十年は其初めに於て實に二十一億八千三百萬圓の驚くべき巨額を有してゐたのであつて、この巨額は漸次入超の形となつて海外に流出しなければならなかつた。果然十年に入つては四月を除く外各月皆正貨は減少の一途を辿つたのである。顧みれば休戦以來、貿易は入超に轉じたに拘らず貿易外の受取勘定多額のため我正貨保有額は、連年増加して七年末の十五億八千八百萬圓から八年までに二十億五千七百萬圓となり九年末には更に二十一億八千三百萬圓となつて本年に入つたのであるが茲に漸く減少の方同に向つた譯である。

而して此減少は全く在外正貨の減少に依るもので内地正貨は却つて増加してゐる。要するに大正十年の我が貿易は之を大正九年のそれに比較すれば輸出に於ては其六割四分に當り、輸入に於ては其六割九分に當つてゐる、即ち大體に於て輸出入共に

大正九年の三割五分内外を減少した。そして大正九年は著しく輸入の激増した年であつたが本年の輸出入間の比例が九年のそれと略相似て居ることから考へて本年も依然輸入旺盛期だと言はなければならぬ。この事は大正八年の輸出入割合と本年のそれとを比較すれば一層明瞭となるであらう即ち本年の輸出は大正八年の五九%六で、輸入は八年の七三%三に當るから如何に本年の輸入が過大であるか了解される。入超期たる上半期は勿論、出超期たる下半期に於ても本年は連月輸入超過であつて、而も其入超額は大正九年と略同一額の多きに達してゐる。

第三 物 價

物價問題に關聯して本年劈頭に起つた一大事件は米價維持の運動であつた。米價は深川市場標準中米に就て見るに、大正八年八月以降五十圓代を凌駕し、九年三月には五十四圓代に上つたものが、同年末には三十圓代を割るに至つた。そこで農家は播州赤三等米卅六圓を標準として、非賣同盟を

結び、一方政府をして過剩米を買上げしめ以て米價を維持せんとした。之れが指導に當つた者は帝國農會と其下に立つ道府縣農會であつた。けれども大した結果は現れなかつた。深川正米各等平均相場は一月の二十八圓代から三月には二十五圓代となりそれより毎月稍々反騰の傾向を示したがそれでも七月初は二十六圓三十錢であつた。併し兩期に於ける未曾有の雨天続きは十月二十九日に三十九圓五十錢に昇騰せしめた。併し米に關しては正確な統計がない。

次に本年の全般に亘つての物價状態を顧みれば、最初の三ヶ月は漸落の状態であつた、昨九年四月以來滿一ヶ年の間月々下落を續けて來たのである。即ち大正二年一月を基數として九年三月の物價指數は實に三一五・八(東洋經濟新報社調査)であつて之を最高とし爾後一ヶ年間に指數は一二八・三を減じて一八七・五となり四割六厘の下落を示したのである。然るに經濟界は漸く底を入れて本年四月以降十月までの七ヶ月間は月に反騰の傾向を持續し、此間指數は

二九・三を増して十月は二一六・八となり約一割六分の騰貴を見せたのである。然るに十一月には指數五・七の反落となつた、が翌十二月には再び少しではあるが騰貴した。表に示せば次の如くである。

總 指 數 表

月	大正		對前月末 騰落點數
	八年	九年	
一月	二八・七	三一・二	落 六・九
二月	二〇・九	三九・二	落 三・五
三月	二〇・六	三五・八	落 八・二
四月	二〇・四	二八・八	騰 三・四
五月	三〇・三	二七・一	騰 一・三
六月	三三・〇	二六・八	騰 〇・二
七月	二四・四	二四・七	騰 一・五
八月	二四・二	三三・〇	騰 三・〇
九月	二五・四	三三・四	騰 九・〇
十月	二六・八	三三・四	騰 二・〇
十一月	二九・一	二九・四	落 五・七
十二月	二九・一	二六・一	騰 〇・六

さて、右の表に現はれた本年中の騰落を差引いた五・六は大正九年十二月に比して騰貴した、數字に當る譯である。即ち物價は本年中に二・七%の騰貴を示した。

以上に依て之を見るに財界は昨年の恐慌後大體不景氣の慘狀を持續してゐるにも拘

らず物價は依然として高位を持し寧ろ本年春以來漸騰の方向を進みつゝある。物價は高くして事業は振はず、失業者は續出して生活不安は濃厚になつて來た。一方政府の財政は徒らに放漫である上に、二十億の正貨を保有しながらも金の輸出禁止を續行し、爲めに通貨は膨脹し我國の物價は世界に於ても一頭地を抜くの高位を保つてゐる本年十一月末に於ける日英米三國の物價指數を比較すれば次の如くである。

▲十年十一月物價指數比較

平均指數	東京	ロンドン	ニューヨーク
穀物	二〇九、一	一三三、一	二〇〇、〇
織物及同原料	一五二、八	一五九、九	一〇六、四
金屬	二四三、八	一七六、七	二二二、〇
(備考) ニューヨーク指數は十一月初他は末	二二二、六	一四七、二	七三、一
▲ニューヨーク指數を一〇〇として			
比較	東京	ロンドン	ニューヨーク
平均指數	一七四、二	一三五、九	一〇〇、〇
穀物	一四三、六	一四七、四	一〇〇、〇
織物及同原料	二〇〇、六	一四六、〇	一〇〇、〇
金屬	一七二、四	二〇四、一	一〇〇、〇

(備考) 以上二表共東京は東洋經濟新報社指數、ロンドンはエコノミスト社、ニューヨークはアラッドストリート社の指數。大正二年一月を一〇〇としたのである。

即ち之を平均指數に就いて見れば、戦前の大正二年一月に比し我國の物價は實に二倍強であつて英米の物價騰貴率よりも著しく高い。又我國の穀物は米國の約一倍半で織物及同原料は二倍以上である。次に我國の物價指數を稍詳しく各類別に就いて見よう。

各類別指數最低表

	九年	十年	十年
	最高(月)	最低(月)	十二月
穀物	二七・七(2)	一三・三(3)	一五・九
其他食料品	二七・四(2)	二七・六(4)	二七・六
織物及同原料	四九・四(3)	二六・三(3)	二二・八
金屬	二八・八(3)	二四・五(9)	一八・一
雜品	三五・五(3)	三九・八(7)	二五・九
内譯			
燃料	三三・二(3)	二四・〇(7)	三〇・七
建築用	三五・七(3)	二四・〇(7)	二六・二
工業用	三四・九(3)	三五・五(7)	二四・一
肥料	三五・七(9)	二三・五(3)	一七・八
印刷	四七・六(3)	二四・六(12)	二四・六
總數	三五・八(3)	一八・七(3)	二二・七

穀物、織物及同原料は本年二月に於て、金屬は同九月に於て、最高時の二分の一以下

の指數に激減してゐるが、其他食料品、雜品の二類は下落の程度割合に少く、殊に其他食料品の如きは本年十二月末は實に從來の最高指數(九年二月)を越ゆること二・二に及んで居る。即ち本年十二月末の其他食料品は戦前(大正二年一月末)の二倍七割餘雜品は二倍五割餘の高位である。

本年中に於ける我國の物價は品種に依り著しい差があつて極めて亂調子を示してゐる、今之を表に就いて見れば次の如くである。

十二月末指數物品別最高最低表

	最高	最低
穀類	二八・四(小麥粉)	二四・〇(大麥)
其他食料品	四四・五(漬物)	二七・八(砂糖)
織物及同原料	三六・四(ネル)	一七・一(棉花)
金屬	二五・三(洋釘)	六・一(錫)
雜品	四四・二(花崗石)	一四・二(ペンキ)
内譯		
燃料	三六・一(薪)	二七・三(石油)
建築材料	四四・一(花崗石)	一四・二(ペンキ)
工業用品	四〇・〇(生漆)	一六・〇(曹達)
肥料	一九・九(練粕)	一四・八(豆粕)
印刷	二四・六	

總品數六十七種の中最高は四五・四・五、最低は六八・一、其差三八・六・四で實に最低指

数の六倍に近く、同一類別内に於ても最高と最低との差は何れも最低の二倍以上と云ふ亂脈振りである（表は大正二年一月末を等しく一〇〇としての計算である。）故に物價が如何に本年中に於て順調を缺いでゐたかが察せられる。

第四 金融

本年中の通貨の情況を表に示せば次の通りである。

兌換券發行(單位千圓)

十年	最高	最低	限外最高
一月	一、五二、一〇九	一、〇八七、四七	二、五、五六一
二月	一、三三、三六六	一、〇三七、五八八	
三月	一、一七、六六四	九八八、七五四	
四月	一、四七、三八四	一、〇〇、七七五	
五月	一、三三、五三三	九七九、七三三	
六月	一、二八、八四三	一、〇四、三三三	
七月	一、二〇、九〇七	一、〇三六、六六四	
八月	一、一九三、五八六	一、〇六七、二四九	
九月	一、三三、九三五	一、〇七四、六四七	
十月	一、三五、七九九	一、二三、三七一	
十一月	一、二八三、一三〇	一、〇三、二八七	
十二月	一、五九、八六三	一、一六四、六九五	一八〇、九七三
全年	一、五九、八六三	九七九、七三三	一八〇、九七三
九年	一、五五、〇五〇	一、〇二七、二九四	三三五、三七三
八年	一、五三、八三二	七七七、七九八	四一、八五四

七年 一、二四、七元 六三、元一三二、八三
即ち大體通貨は前半期に於ては縮少し後半期に及んで膨脹した。茲に考慮に入れなければならぬことは正貨保有高の減少（貿易の部参照）であるが、其影響は下半期に至つて金融市場の上に現はれ、東京市場の金利を見るに五月以降漸騰の勢を示したのである。

次に日本銀行の貸出及び預金の状態如何貸出に於ては外國爲替の貸付は之を昨年のそれに比すれば驚くべき激減であり、割引貸付も大體漸減の方向を失はない。又預金に於ては政府預金は大體九年よりも減少し特に十二月に入つて著減した。又民間の預金も同じ方向を取つてゐる。

日銀貸付(單位百萬圓)

月央現在	外國爲替貸付		割引及貸付金	
	十年	九年	十年	九年
一月	五三・九	二八・九・六	一〇四・五	一八〇・九
二月	五八・六	三三・一	九九・七	二四〇・〇
三月	四三・〇	三〇・〇	八九・六	二五九・八
四月	四一・一	二八・七・八	八〇・八	四〇三・七
五月	三八・二	三〇・四	六九・五	四三〇・九
六月	三七・七	二五・〇・〇	六九・三	三六〇・六

月央現在	政府預金		民間預金	
	十年	九年	十年	九年
一月	九八・一	一、〇八五・四	二〇九・一	一一七・九
二月	九八・一	一、一三六・七	一五三・五	三七・九
三月	九八・六	一、一五八・七	二二三・三	二五・六
四月	一、〇七四・五	一、一六七・四	一六一・五	六五・五
五月	一、一〇七・四	一、一七六・六	一四四・五	一一九・五
六月	一、〇五三・八	一、一〇一・四	一〇七・六	八〇・八
七月	一、〇四七・四	一、〇九四・八	二二八・〇	九三・六
八月	一、〇六三・四	一、〇四四・一	四三・一	七一・三
九月	一、〇四三・〇	一、〇四四・一	九七・七	五五・八
十月	一、〇七六・三	九六九・五	三七・九	一一四・五
十一月	一、〇四六・八	一、〇八八・八	三八・九	一〇五・三
十二月	九九二・六	一、〇三三・〇	三三・九	一八二・〇
八年三月	一、〇九四・三		四三・三	
七年三月	九七二・五		四八・六	

（備考）以上二表共月央現在とは毎月十五日に近き週末現在を指す。

更らに手形交換高を見るに、大正九年よ

りは減少したが、月と共に増加し十一月に至つては一月よりも約廿一億の多き交換高を見せた、表に依れば次の通りである。

全國手形交換高

月	金 額		一枚當金額	
	十年	九年	十年	九年
一月	四、二八〇・一	七、二〇二・二	二、三九一	三、五九〇
二月	四、七三二・三	七、八五八・七	二、四一九	三、六七〇
三月	五、一五九・九	九、三八五・六	二、三七八	三、六九五
四月	五、二二一・七	七、五三一・七	二、四三八	三、三六九
五月	五、三六八・七	六、五七五・三	二、三〇八	三、一〇六
六月	五、七四一・七	五、六四三・二	二、四〇二	二、七六八
七月	五、三三五・六	四、八七五・七	二、三〇三	二、四七一
八月	六、〇三七・三	四、六四一・一	二、六三四	二、六二三
九月	六、二四一・五	四、六六九・三	二、六三一	二、三八六
十月	六、〇三七・六	四、四九六・九	二、六五三	二、三三三
十一月	六、三七八・九	四、九〇九・二	二、四八六	二、二八四
累 計	六〇、四八二・二	七、七八二・三	二、四五六	二、〇八二
同八年	六七、一八〇・〇		三、一〇五	
同七年	四七、〇〇一・七		二、三六七	
十二月	*七、三三三・二	五、九二六・五	*二、五四八	二、二七七

備考 *印は大阪東京横濱京都神戸名古屋の交換所のみ合計

第五 在 荷

本年に於ける倉庫在荷の状況を表示すれば次の通りである。

全國八十二倉庫在荷月別表

月	價 額		數 量	
	九年	十年	九年	十年
一月	七五・四	七九・三	二七、八三三	三、八八四
二月	九八・三	六三・一	二七、五三三	二、六三一
三月	九八・三	六三・一	二七、六六八	二、七二七
四月	一、〇八一・六	五九三・七	二九、五〇八	二、四二五
五月	一、二六五・二	五五一・八	三〇、三四四	二、七六四
六月	一、三六六・二	五五五・四	三二、三四四	二、五五〇
七月	一、二八五・二	五三九・七	三〇、八四九	二、〇、五三九
八月	一、二四〇・七	五二八・一	三二、五五五	二、〇、八二九
九月	一、一五〇・九	五三一・〇	三六、一八一	二、〇、七三三
十月	一、〇二五・五	五七〇・〇	四〇、九三九	二、三、二〇三
十一月	九三八・二	五五五・七	三七、四〇八	二、八、四六四
十二月	八五五・二	—	三四、五九九	—

昨年七月末十二億八千餘萬圓の巨額に達した全國倉庫在荷は同年八月より減少し始め同年末には最高時から見ると價格に於て四億三千萬圓減少した事になつてゐるがこれは價格暴落の結果であつて數量から言へば同年十一月始めて減少の徴候を現はしたのである。かくて本年に入るや、工場閉鎖、休業、事業の縮少、生産制限等に依て商品界の整理次第に進涉し、價格に於ても數量に於ても著しい減少を爲した。けれど

も在荷の減少は上述の如く消極的な生産制限に因ること最も多いので、必ずしも輸出に因るのではない。のみならず八月頃からの中間景氣に依る物價の反騰は却て益々輸出を妨げて輸入を助けたので、各方面の生産制限は非常に緩漫になり、在荷減少の勢が本年九月頃から一頓挫を來したのである但しその以後も全體としては甚しく増加はしてゐない。